

mundi



[ムンディ]

2014 December No.15 **12**



特集
貧しさからの脱却

貧しさと幸せ

from South Africa 南アフリカ



世界一危険な都市と呼ばれる南アフリカのヨハネスブルク。その近郊には、20世紀最大の負の遺産ともいわれる人種隔離政策、アパルトヘイトを象徴する黒人居住区「タウンシップ」がいくつも残されている。

中でも最も大きなタウンシップを、地元の住人らは“ソウェト”と呼んでいる。アパルトヘイトと戦い、民主主義を築いたネルソン・マンデラの努力によって大きく改善されたはずのこの地域には、今もブリキ小屋の家々が立ち並び、路地では羊の頭が食料として売られていた。現在でも国民の3分の1が貧困層で、トイレはもちろん、電気も水道もない家で暮らしているのは事実のようだ。

しかしアフリカの青い空の下、そこには妙にすがすがしい風が吹いていて、大人も子どももみんなが笑っていた。「ここは平和だよ」。そう語りかけるかのような笑顔に魅せられ、私は思わずシャッターを切った。幸せって何だろうか？



撮影：ごとうゆかり（愛知県／英語講師）

あなたの作品募集中！

「my photo」では、あなたが撮影した写真を募集しています。貧困や環境問題などをテーマにした写真、国内外問わず国際協力の最前線で活動に励む日本人や開発途上国の人の姿、テレビや新聞ではなかなか報じられない土地の風景や人々の暮らしなど、国際協力や途上国を身近に感じられる写真を、撮影時のエピソードを添えてご応募ください。応募作品の中から毎号1枚、本コーナーで紹介させていただきます。

応募条件 ①応募者本人が撮影した作品に限ります。②被写体に関する肖像権は、応募者の責任において了解が得られているものとします。③写真は、解像度が300万画素以上(目安)で撮影されていること、また画像の記録形式はJPEGを推奨します。

応募方法 お名前、連絡先(電話番号とEメール)、エピソード(300～350字)、記名の可否をご記入の上、写真とともに応募先アドレスまでEメールでお送りください。

*応募作品は本コーナーの他に、事前確認の上でJICAの広報活動に活用させていただく場合があります。ご記入いただいた個人情報はこちら以外の目的では使用いたしません。また、応募作品はご返却いたしませんので、あらかじめご了承ください。

応募 / 問い合わせ先

jica-photo@idj.co.jp

(『mundi』編集部宛)

「mundi」はラテン語で“世界”。開発途上国の現状や、現場で活動する人々の姿を紹介するJICA広報誌です。

Contents

02 my photo 貧しさと幸せ 南アフリカ

04 特集

貧しさからの脱却

地域の命は私たちが守る ガーナ

未来への道をその手で タンザニア

森を守り、民を支える インド

私たち、こんなことに取り組んでいます！ ～日本企業のパートナーたち～



18 PLAYERS 全ての人と共に暮らせる社会へ 社会福祉法人佛子園

20 地域と世界のきずな

遠隔地にも公平な教育を

沖縄県



22 JICA Volunteer Story 本郷 良和 青年海外協力隊／ベネズエラ／コミュニティ開発

24 JICA STAFF 吉田 進一郎 JICA社会基盤・平和構築部 ジェンダー平等・貧困削減推進室

25 JICA UPDATE

26 Voice 堀米 薫 作家

28 ココシリ 「ここが知りたい」 いろんなトピックを分かりやすく解説！

30 地球ギャラリー

ベネズエラ

世界一雷の多い湖



37 イチオシ! 本・映画・イベント

39 MONO語り カギ編みストールであたたかに

40 私のなんとかしなきゃ! NORA 歌手



JICAのビジョン

すべての人々が恩恵を受ける、
ダイナミックな開発を進めます

Inclusive and Dynamic Development

表紙

撮影：久野武志

エチオピアの農村で出会った少女。兄弟たちの世話は彼女の役割だ



開発途上国の人々が 直面する貧困の現実

1・25ドル。

これが一体、何を示す数字か想像がつくだろうか。1日1・25ドル未満の生活。世界の貧困問題を語る時によく使われる指標だ。

それでは、あなたの1日を振り返ってみよう。朝起きて朝食を食べ、通勤・通学をし、夜寝るまで、1日に1・25ドル、つまり約145円しか使うことができないとしたら―。もちろん、家賃や光熱費もここから払わなければならない。とても今の生活を送ることはできないだろう。しかし世界を見回すと、そんな日本の私たちの生活は「スタンダード」ではないのだ。

開発途上といわれる国や地域では、いまだ多くの人が貧困に直面している。それを明確に表しているのが、1日1・25ドル未満の生活を送る人々の数。なんと、今もなお10億人を超えている。

日本もかつて、貧困に苦しんだ時代があった。第二次世界大戦後、日本は一面の焼け野原に。一から、いやゼロの状態から、国づくり、

復興に取り組みなければならなかった。自治体による公共サービスどころか、多くの人々は食べる物すらも満足に得ることができない日々。経済も停滞状態の中で、人々は田畑を耕し、自らの食べ物を作るだけで精一杯だった。

しかしその後、政府の戦略的な産業政策と国民一人一人の努力により、日本は見事に生まれ変わった。長きにわたり磨き上げてきた技術力を生かして高度経済成長を成し遂げ、全ての人に恩恵が届くよう国民皆保険などの制度の充実にも努めた。完全に貧困がなくなったとはいえないが、私たちは確実に、貧しさからの脱却の道を切り開いてきた。

しかし途上国では、まだまだ貧困問題が深刻だ。それは数字だけで表現できるものではない。社会の課題のあらゆる側面に表れる。貧しさは根深く、そう簡単に解決できるものではないからだ。またそれぞれの国が発展するにつれて、都市と地方の格差などまた新たな問題が生じてくる。全ての人が平等に豊かさを実感する社会の実現は、そう容易ではない。

特集

貧しさからの

脱却

開発途上国が直面するさまざまな課題。

それらは全て、人々の“貧しさ”を引き起こす要因となっている。

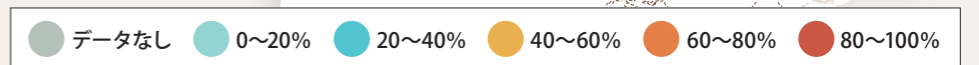
一人一人が豊かで幸せな生活を送れるよう、

国際社会が一丸となって貧困問題に立ち向かっている。



世界で
1日1.25ドル未満
で生活する人
約**10**億人

1日1.25ドル未満で生活する人の割合



参考：世界銀行ホームページ

全ての人が幸せを 感じられる社会を

2000年代に入ってから、この先が見えない問題に光が差してきた。国際社会が一体となって「貧困削減」「格差是正」に取り組もうという機運が高まってきたのだ。そのきっかけとなったのが「ミレニアム開発目標 (Millennium Development Goals: MDGs)」。2000年、ニューヨークで開催された国連ミレニアム・サミットで国際社会が1つのテーマを囲み、「貧困削減」「格差是正」などをキーワードに8つの目標を定めた。

だ。その一つである「ゴール1」は「極度の貧困と飢餓の撲滅」。2015年までに貧困と飢餓に苦しむ人口を半減させるという数値目標を明確に掲げている。

日本もこの動きに積極的に参加している。政府開発援助 (ODA) を通じた国際協力を始めて60年。その間、一貫して目指してきたのは、途上国の人々が一刻も早く貧しさから脱却し、格差なく平等に豊かな生活が送れる国づくり。教育、保健医療、運輸交通、環境などの分野で、インフラ整備から人材育成まで、さまざまな取り組みを進めてきた。全ての分野における取り組みが、草の根の人々の貧しさの解決につながるからだ。

しかし、MDGsの達成に向けた取り組みを経ても、サハラ以南アフリカや南アジアでは、東南アジアなど他の地域に比べ、貧困削減

が進んでいない。そこでJICAは貧困削減に対する効果的なアプローチとして、現地の人々に必要な能力の向上に向けて取り組みを進めている。①経済的能力(生活手段の確保および収入向上)、②人的能力(基礎的生活能力の向上)、③保護能力(脆弱性の克服)、④政治的能力・社会文化的能力(政治・社会参加の実現)の4つの能力だ。一人一人が豊かさを感じながら、未来の国づくりに関わることができるようになる。国際社会が一丸となった挑戦が、これからも続いていく。

特集
貧しさからの脱却

紙芝居を使って赤ちゃんのケアの仕方を説明する保健師のグロリアさん。「絵を使った説明は頭に入りやすいと患者さんたちからも好評です」



高層ビルが立ち並ぶアクラから車
しかし、まだまだ課題はある。
フリカの「優等生」とも呼ばれて
きた。
約半世紀にわたり、大きな
紛争を経験することもなく、ア
クセスは不便で
ない。北米などから直行便
が飛んでいて、アクセスは不便で
ない。約半世紀にわたり、大きな
紛争を経験することもなく、ア
フリカの「優等生」とも呼ばれて
きた。

終えた地でもある。
熱病の研究をし、志半ばで生涯を
指に入るほど。あの野口英世が黄
熱病の研究をし、志半ばで生涯を
終えた地でもある。
指に入るほど。あの野口英世が黄
熱病の研究をし、志半ばで生涯を
終えた地でもある。

アフリカの中でも、日本人にと
ってなじみのある国ガーナ。多く
の人が思い浮かべるのは、やはり
チョコレートだろうか。原料とな
るカカオ豆の生産は、世界で三本
指に入るほど。あの野口英世が黄
熱病の研究をし、志半ばで生涯を
終えた地でもある。

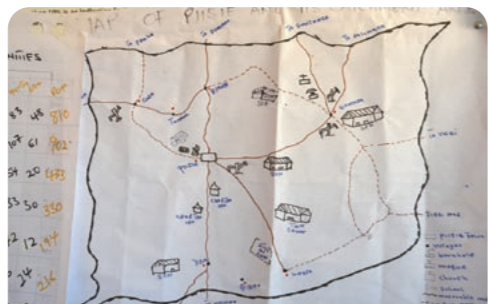
片道12時間 辺境の地に生きる人々

どこまでも真つすぐに続く道、
大きな楕円を描いて広がる地平
線。視界を遮るものがほとんどな
い中で、唯一の障害物としてヤギ
の群れが現れた。大きなトラック
にさえ目もくれず、堂々と前を横
切っていく。西アフリカのガーナ
の日常だ。

を北に走らせると、明らかにその
発展ぶりが違うのだ。そう、地方
の人たちの生活は、決してまだ豊
かとはいえない。その現実を確か
めべく目指したのは、車で北に
12時間、隣国ブルキナファソと国
境を接するアッパーウエスト州
だ。「幹線道路はよく整備されて
いるので、時間はかかりますが快
適ですよ」。州都ワマで案内して
くれたのは、池田高治JICA専
門家（アイ・シー・ネット株式会
社）。青年海外協力隊として、ホ
ンジュラスでマリアリア対策に奔走
したのは約30年前。以来、国際協
力一筋の池田専門家はかれこれ
もう8年、この州に通い続けている。
彼が力を入れてきたのが、地域の
人々を巻き込んだ保健医療サービ
スの向上だ。

すぐに治療できない 不安が脅かす健康

「いらつしゃい。患者さんの診
察が終わるまで少し待ってくださ
いね」。朝9時、池田専門家と一
緒に訪れたのは、州都ワマからさら
に車で1時間ほど行ったところ
にある長屋。入口で迎えてくれたの
は、保健師のグロリア・ドマナン
さんだ。妊娠2カ月目に入ったと
ころのアサナ・イデウンスさんの
定期健診をしていた。「妊娠中で
不安も多いから、グロリアさんの
アドバイスは心強いよ」。大き



【右】村に建設された長屋造りの医療施設。診察室の隣には、保健師の居住スペースがある
【左】診察室の壁には、管轄地域の書きの地図が貼られている

From
Ghana
ガーナ



地域の命は 私たちが守る

アフリカの中でも比較的情勢が安定し、
順調に経済成長を続けてきたガーナ。
しかし、地方での生活は豊かとはいえない。
全ての人が安心して暮らせる社会を目指し、
地域が一丸となった取り組みの現場取材した。

写真：久野武志（フォトグラファー）



ガーナの地方部でせつせとまき
や炭を運ぶ女性たち。決して豊
かとはいえない生活だが、村は
人々の活気であふれている

40度近い熱で来院した4歳のアブダル・ワリンくん。マラリアの疑いがあるため、体をふいて清潔にしていた



車ですらに1時間、次に向かった先はドリモン亜郡保健所。手術室や分娩台、ワクチン用の冷蔵庫、医薬品などがそろった施設だ。所長のドルタス・ヌオサさんは、3カ月に一度、グロリアさんのもとを訪れて設備や備品、カルテなどのチェックをしているという。訪問時に記入するチェックシートは、プロジェクトのアドバイスを受けて作成されたものだ。「何かあったらいつでも連携できるように、

**みんなの力で
貧困から脱却**

識が広まってきているように感じている。

「住民自身でCHPSのシステムを動かす体制は整いつつあります。もともとたくさんの人材が育ち、建物もできれば、より多くの人が健康的な生活を送れるようになるはずです」と池田専門家。住民みんなのでつくり上げていく地域の仕組み。それを動かすために汗を流す人々。アッパーウエスト州では、自身が果たすべき役割を一人一人が考え、行動しようという動きが生まれつつある。



[右]日本の協力でアッパーウエスト州には約60のCHPSを建設中。株式会社毛利建築設計事務所が施工監理を担当し、機能的で長持ちする工夫が凝らされている
[左]州内の医療保健の状況について、池田専門家に説明するサリア郡保健局長。「CHPSが持続的に機能するように、住民の関わりをもっと密にしていきたい」

**人々の健康の意識を
高めるために**
村々の家を回って出張診療をすることも、CHPSの保健師たちの重要な役割の一つだ。「健康に対する意識を一人一人に広めるためには、彼らの生活場所に足を運ぶことも大切です」とグロリアさん。移動時の相棒は、YAMAHAの真っ赤なバイクだ。

施設だからです」と池田専門家は力を込める。CHPSごとに運営委員会があり、住民と保健師が定期的に会合を開いている。グロリアさんの診察室には、模造紙にびっしりと書かれた「TODORIST」が貼られていた。室内の切れた電線の修理、分娩用の離れの建設……。地域の誰が責任を持つて担当するか、予算をどう使うかも自分たちで決める。「本当にどうしたらいいかを真剣に考えているからこそ、いろいろなアイデアが生まれてくる。地域の私たちの命は地域で守るという意識が広まってきているように感じている。」

「運営委員会の発案により、CHPSに行く道路、水道施設の修復など、保健医療分野以外の取り組みも強化されるようになりました。全てのセクターが関わり合っている問題。最終的には、貧困削減につながるものです」と、ウエスト郡保健局長のバシリア・サリア局長は話す。

最近特に力を入れてるのが、母子保健分野の啓発活動。アッパーウエスト州で5歳になる前に命を落としてしまう子どもは1000人に128人、妊産婦の死亡率は10万人に66人と、依然として改善が必要だ。「これ以上死んでいく妊産婦を見たくない」と、自宅出産をやめるなど住民主導での取り組みが始まっている。



“地域の保健室”で診察を待つ住民たち。お互いに助け合って生きる精神が広がっている

くなくなったおなかをさすりながら話すアサナさんの家は、ここから歩いて5分だという。

「この建物はいわゆる、地域の保健室。保健師が常駐して、コミュニティの人たちの健康を守っているんですよ」と池田専門家。ガーナで設備の整った医療施設といえは、たいてい1郡に一つ程度。距離的にも金銭的にも、一般の人たちの日常からは遠い存在だ。保健医療サービスを受けることができず、病気が悪化したり、命を落としてしまう人もいる。救える命を見逃さしたくない。みんながそう思っていた。そこで政府

は2000年代に入ってから、コミュニティレベルにCHPS (Community based Health Planning and Services) と呼ばれる医療施設を設置することに。身近な場所ですぐに治療を受けられ、衛生や疾病予防の地域のリーダーとなる保健師を駐在させるような仕組みづくりに乗り出した。

「隣の部屋に寝泊まりしているの。24時間、いつでも対応できるようにね」とグロリアさん。診察室の机の上にはカルテが積み重ねられていて、大きな病院をたたくように、すぐに診てくれる人がいたら安心だ。

しかし当初CHPSは、モノとしてあるだけできちんと運営されていなかった。そこで池田専門家らのプロジェクトチームが保健局のスタッフたちと、CHPSの運営の仕組みの制度化や教材の作成、保健師たちの研修に汗を流してきたのだ。ウエスト郡保健局長でCHPSの能力強化を担当するムサ・アリさんは、「昔から、身近なところで、病気で苦しむ人をたくさん見てきた。一人一人が健康に対する意識を高めれば、救うことができる命はたくさんある。それはCHPSの成功にかかっていると、日本人専門家の皆さんにも力を借りて試行錯誤しながら進めてきました」と話す。



西アフリカでの流行が懸念されているエボラ出血熱。ガーナは感染国ではないが、日本の協力などで作成したポスターなどを使って、青年海外協力隊員などが予防の啓発活動を実施中だ

幹線道路から一本入ると、アフリカ特有のでこぼこ道。この先にCHPSはある



四苦八苦しながら測量の方法を学ぶ県のエンジニアたち。宮本宏一専門家(エイト日本技術開発)は手を出したいのをぐっと我慢して見守る



日本での研修では、青森県弘前市で橋梁の点検を視察。最先端技術の習得にも熱心だ

そう話すのは、道路整備に携わる徳永達己JICA専門家(株式会社エイト日本技術開発)だ。タンザニアとの出会いは約30年前、青年海外協力隊として赴任し、道路整備に必要な資機材の管理を担当したところからの長い付き合いだ。「隊員時代から知っている多くのエンジニアたちが、今は建設省や自治体の要職に就いています。また彼らと一緒に仕事ができるのがうれしい」。その言葉通り、当時から続く人脈が生きている。

しかし、世界を見回すとそれは当たり前ではない。その一例が、アフリカ東部のタンザニア。ダルエスサラームなどの都市部から延びる幹線道路は整備が進んでいるものの、地方道路のうち、アスファルトで舗装されているのは1%だけ。雨が降れば地面がぬかるみ、車のタイヤがはまってしまふ。これではせっかく作った農作物を市場に持っていくこともできず、病人を急いで病院に運ぶこともできない。「タンザニアの面積は日本の2.5倍。一つの地方自治体が管轄する面積が大きい。まずは大きな道路を優先して整備が進められてきました。しかし、毛細血管のように各地に延びる地方の道を整備する財源が足りなくなってしまうのです」

スコップなどを使い、道の両側に水路をつくる住民たち。参加型の道づくりには女性も多く参加している

人の手で 道路はつくられる

私たちの暮らしを支える道路。日本では全国どこに行っても、そのほとんどがアスファルトで舗装されている。

しかし、世界を見回すとそれは当たり前ではない。その一例が、アフリカ東部のタンザニア。ダルエスサラームなどの都市部から延びる幹線道路は整備が進んでいるものの、地方道路のうち、アスファルトで舗装されているのは1%だけ。雨が降れば地面がぬかるみ、車のタイヤがはまってしまふ。これではせっかく作った農作物を市場に持っていくこともできず、病人を急いで病院に運ぶこともできない。「タンザニアの面積は日本の2.5倍。一つの地方自治体が管轄する面積が大きい。まずは大きな道路を優先して整備が進められてきました。しかし、毛細血管のように各地に延びる地方の道を整備する財源が足りなくなってしまうのです」



From
Tanzania
タンザニア



未来への道を その手で

約8割の人々が農村で暮らすタンザニア。農作物を売るにも、学校や病院に行くにも道路が必要だが、地方ではほとんど整備が行き届いていない。その現状を変えようと、現地の人々が立ち上がった。



笑顔で迎えてくれる子どもたち。バスなどの公共交通機関が通らず、学校まで歩いて何時間もかかる地域もある



未整備の地方道路は水はけが悪いため、少しの雨でも川のようになって通行できない



道づくりを請け負う地元業者の担当者と打ち合わせをする徳永専門家(右)

ここで徳永専門家が大切にしているのも人づくりだ。「計画から設計、発注、施工監理まで私たちがやってしまったのは、現地の人々にノウハウが身に付きません。開発途上国への支援は、子育てのよくなるもの。彼ら自身で考え、実施できるようにすることで、いつかはお互いが親離れ、子離れをしなければ」と話す。

現在ドドマ州とイリンガ州で試験的に地方道路の整備を行いながら、国内の各州へ普及させるためのガイドラインをつくっているところだ。「県などのエンジニアたちを日本に招き、青森県や高知県、埼玉県を始め全国を回り、定期点検といった維持管理方法を見てもらいました。日本だからこそ、

「農作物の仲買人が村まで買い付けに来るようになった」、「農作物を新鮮なまま市場に運べるようになった」、「売値が上がった」。畑と市場、家と学校などが道路でつながることで、生活にも活気が出てきた。自身の手で未来は変えられる。その手こたえを今、人々は実感している。



ほうき草の産地であることを生かし、品質の良いほうきを作って流通させる取り組みが続いている

そこで日本は、2007年から円借款を通じて植林事業を開始。単に木を植えるだけでなく、住民が森林の経済的価値を認識し保全につなげるべく、森林管理組織の設立、森林資源を活用した地場産業の振興、マイクロファイナンスの普及などに取り組んだ。

「国際協力に携わって20年以上。その中でもこの取り組みは障害が多かった」。植林事業の立ち上げを担い、約20人の専門家チームの

リーダーを務めた辻さんは、当初の苦労をこう振り返る。

これまで産業らしい産業はなかったトリプラ州。野生の果実、薬草、家具の材料となる竹など、森を活用して商品を生み出す方法を探った。しかしそこからビジネスに発展させるのは、そう容易ではない。そこで辻さんは共に活動するインド森林局の森林官、ゲッドム・サミュエル・ラジュさんらと協力して、やる気のある住民を集

住民と森林官の努力で生まれたビジネスチャンス

その努力の結果、養豚や養鶏、魚の養殖、森の植物や竹を使った特産品作りなどのビジネス展開は、現在456村の3万8000世帯以上にまで広がった。「現金収入が増えて、家を建て替えた」、「バイクを買って、何時間もかけて歩いて隣町まで数十分で行けるようになった」と、みんなうれしそう。「何より仲間と一緒にものづくりに取り組む時間は楽しい」と、線香の芯となる竹串作りを始めた女性も生き生きと話す。

「商品を作っても流通させなければ意味がない」と、世界の商人であるタフなインド人ビジネスマンと何度も交渉し、トリプラ特産として知られるほうきなどの市場開拓にもつなげた。

辻さんらは、事業のカギとなる住民たちと直接接する森林官の能力向上や森林局の組織改革にも力を入れてきた。現場の意見が反映

されていくインドの大規模な森林行政の中でも着実に事業を実行できるよう、局内に新しい課を設け、自主性と責任感を養える仕組みに変えた。そんな変革こそが、多くの村でのビジネスチャンスにつながったのだ。

「政府に対する不信感が強いこの地域で、こうした事業を進めるのはそう簡単ではありません。事務所から丸一日かかるような村にも、ラジュさんをはじめとする多くの森林官が度々出向き、村長や住民と信頼関係を築いていったのです」。こう話すのは、長年南アジアの研究を続け、現在JICAインド事務所で企画調査員を務める榎本美樹さん。トリプラ州は1971年のバングラデシュ独立の際、トリプラ王国があった地域にインド人が大量に流入し、先住民の人々は殺されたり土地を奪われたりと喪失の歴史を抱えているからだ。

「森林を守るためには、住民たちと深い関係を築き、彼らの生活を改善するのは必須だった。インド政府にとっても村人にとっても大きな変革となった事業に関わることができ、感謝している」とラジュさんは話す。

情熱を持って住民の貧困削減に取り組んできた森林官らの経験が、インドの未来に光をともしている。



子どもをそばに座らせて、布を織る女性。トリプラ州では部族ごとに独特の織り方があるため、布を見ればどの部族かが分かるという

行き詰まる
自給自足の暮らし

インドの首都ニューデリーから東へ2400キロ以上。バングラデシュを挟んで東側に位置する北東7州のうち、トリプラ州は最も

面積が小さく、東南アジア系の先住民が多く暮らす地域だ。人口の約8割が山岳・丘陵地帯に住居を構え、森の恩恵を受けながら暮らしている。

経済成長が著しいインドだが、いまだ3人に1人は1日約65ルピ

1(約120円)での生活。農業を中心に自給自足の生活を続けてきたトリプラ州でも、森林資源の過剰採取や焼畑農業で森林の荒廃が進み、これまでの生活を維持することが難しくなり始めていた。

今から7年前、日本工営株式会

社の辻新一郎さんはトリプラ州を初めて訪れた。その時、森と共生して生きる「森の民」に強い関心を持ったという。「花や草木などの利用方法にも詳しい。彼らの知恵と技術こそが、森林保全と生活向上のカギとなるはずだ」。



森を守り、民を支える

インドの辺境の地として知られる北東部のトリプラ州。森林の恩恵を受けながら生きる「森の民」の生活向上を目指し、林業界のプロフェッショナルたちが奮闘している。



トリプラ州に広がる森。車が入れる場所は限られるため、その先の村へは徒歩で進む



住民集会では、どの質問にも的確に答える若い世代の姿が見られた。視察した榎本さんは「事務処理能力の高さに驚かされました」と話す



レン・ソティアラさん

PROFILE

所属：エントリー・バイトン社
活動国：カンボジア
共に活動する日本企業：リネットジャパングループ

農機具レンタルで 有機野菜の栽培を可能に



20年以上にわたり内戦が続いたカンボジアでは、農地は荒れ、農業技術も失われてしまいました。内戦終結後、政府は稲作を中心に復興に力を入れてきましたが、野菜の生産は後回しに。その結果、国内で生産できる野菜はわずか1日6トン。なんと1日600トンを入力しています。

そこで私が目指しているのが、高品質の野菜の種と有機野菜の普及。有機栽培は付加価値があるため高く売れるので、貧しい農家の生計向上につながると考えたからで



リネットジャパングループがレンタルしたトラクターで農地を耕し、野菜を栽培

す。野菜の生産性を上げるには、良い種、正しい生産方法に加え、良い土を作ることが大事。しかしそのために必要なトラクターなどの農機は高価で、そう簡単には買えません。そこで、カンボジアで貧しい農家でも利用できる農機レンタルを始めたリネットジャパングループと共に活動しています。

今後は首都プノンペンなどの販売先を探し、農業資材から生産、販売までのバリューチェーンづくりに貢献したいと考えています。



スジャイ・サントラさん

PROFILE

所属：アイキユア・テックソフト社
活動国：インド
共に活動する日本企業：ARUN合同会社

ITで医療サービスを 地方の人々へ



インドでは地方に住む約8億人のうち、人材や施設の不足のため、公的な保健医療サービスを受けられているのは30%だけです。もっと多くの人々がアクセスできるようにと起業し、患者のカルテを病院と共有し、遠隔でも治療のプロセスを監視できる独自のソフトウェアを開発しました。まずは西ベンガル地方に、貧困層でも払える費用で基礎的な保健医療サービスが受けられる28のヘルスセンターを設置。さらに高度な治療が必要となった場合は、

自社のシステムを通じて大きな病院にカルテを共有し、紹介する仕組みです。今年5月までで新たに約2万人が保健医療サービスを受けられるようになり、今後はオリッサやアッサムなどの地方にも広めていきたいと考えています。

こうした活動をサポートしてくれるのが、ARUNの社会的投資です。投資家と私たちのようなベンチャー企業を結び付けてくれるおかげで、貧困層の人々の生活を改善するインパクトを生み出せるのです。



IT技術で大病院とカルテを共有することで地域特有の症例などの知見が積み重なる

特集
貧しさからの脱却

私たち、こんなことに取り組んでいます！

～日本企業のパートナーたち～

ビジネスの強みを生かし、開発途上国の貧困削減に取り組む日本企業も増えている。その取り組みについて、共に活動する現地のパートナーの声をきいてみよう！



クリスピン・スクワさん

PROFILE

所属：クリン・ディベロップメント社
活動国：タンザニア
共に活動する日本企業：株式会社オーガニック・ソリューションズ・ジャパン

農家と共に成長する 干しイモ産業を目指す



タンザニアには、社会格差や農業生産性の低さなど、貧困につながる課題がたくさんあります。それを解決し、この国の発展に貢献できるビジネスを立ち上げようと、20年来の友人であるオーガニック・ソリューションズ・ジャパン営業部長の長谷川竜生さんと試行錯誤を続けてきました。

そしてたどり着いたのが干しイモ。この国はサツマイモ栽培が盛んで、それを原料にした干しイモは、国内市場ではビタミンAが豊富なおやつとして、海外市場では自然派

食品としてビジネスのポテンシャルが高いと考えています。契約農家には無農薬のサツマイモ栽培を指導し、干しイモを製造する会社も設立しました。工場立ち上げに当たり、私は日本で研修を受け、食品加工の技術や品質管理、工場運営、サツマイモの栽培方法などを学びました。農家と共に成長しながら、タンザニアの食品加工産業の頂点に立ち、業界をけん引するような会社に育てたいです。



ダルエスサラームの見本市で干しイモの試作品をアピール



ケルトウマ・アシャフアさん

PROFILE

所属：ソパール・アイトバームラン経済利益グループ
活動国：モロッコ
共に活動する日本企業：株式会社ジェイ・シー・ピー・ジャパン

サボテンが可能性を 秘めた“売れる”商品に



大きな産業がなく、いまだ貧しい人々も多いモロッコの南部、シディイフニ地域。しかし、国内でも有数のウチワサボテンの産地です。サボテンの種子を使ったオイルは、抜群の保水力があると有名。しかも、1リットルのオイルを取るためにサボテン果実が800キログラムも必要という幻のオイルですから、希少価値の高い商品になります。

私はサボテンを使った商品を扱う会社を起業し、女性の雇用促進に取り組んできました。そして、地元のサボテン農

業組合の代表として、ジェイ・シー・ピー・ジャパンと共にビジネスに取り組むことに。生物学を学び、サボテン商品の開発にも取り組んできましたが、商品のマーケティングはまだ未熟。その点、ジェイ・シー・ピー・ジャパンは日本でモロッコの自然美容商品を10年以上販売してきた経験があります。共に商品開発をし、品質を高め、マーケティングをすることで、この地域がサボテンで有名になって発展できると期待しています。



シディイフニ地域にある4万ヘクタールものサボテン農地で収穫する女性たち



デイケアサービスを利用するお年寄りの送迎も担当している研修員のウォンモさん(左)

PLAYERS

国際協力の担い手たち

社会福祉法人 佛子園

全ての人が共に暮らせる社会へ

老若男女、障害の有無に関わらず、みんなが支え合う社会を目指し、斬新な取り組みを進める石川県の社会福祉法人佛子園。その理念が今、ブータンへも広がっている。

障害があっても 生き生きと働ける場所を

ソーシャルインクルージョン。健常者、障害者、お年寄り、子どもなど、全ての人が心豊かに暮らせる社会のことだ。その実現を目指す社会福祉法人

佛子園は、戦後、身寄りのない子どもを育てた石川県白山市の行善寺をルーツに、県内で福祉施設を運営して55年になる。日本海を望む能登半島の東部に、丁寧に手入れされた庭と洋館がある。その名も「日本海倶楽部」。佛子園が運営

する福祉施設の一つだ。地ビール工場とレストランがあり、この地ならではの味を旨味に立ち寄る観光客も多い。ここでは、自閉症やダウン症などさまざまな知的障害のある人々が暮らし、働いている。「こんにちは！」と明るくあいさつしてくれた彼らは、地ビール



日本海倶楽部の施設長、清水さん(左)は「福祉が地域貢献にもつながることが理想」と、地域の人々との交流にも力を入れている

この時に出会ったのが、王室ゆかりの地元NGO、タラヤナ財団。彼らの貧困層の生活改善に向けた取り組みを聞き、ブータンでは障害は前世の悪い行いによると考えられ、障害者は社会から孤立していることを知った。「私たちに何かできることがあるのでは」。そこでJICA草の根技術協力事業を活用して、タラヤナ財団などで福祉分野に携わる人材を研修員として受け入れることに。ゲデンさんは日本に来て4カ月。「ブータンには障害者のための施設が少なく、働く先もないため自立が難しい。佛子園が運営するさまざまな施設で、みんな生き生きと働いているのに驚きました」と話してくれた。

新しい福祉のコンセプトを ブータンへ

佛子園は日本の福祉施設のイメージを変えてきた。小松市にある「西園寺」もそうだ。400年もの間、地域から愛されてきたが、住職が亡くなり廃寺に。それを佛子園が温泉を併設した福祉施設として08年に生まれ変わらせた。中に入ると、地元のおばあちゃんがブータンからの研修員、ウォンモさんとこやかにおしゃべり中。夕方までのデイケアサービスを終え、帰るところだ。車いすに乗った障害のある利用者も一緒に時間を過ごしていた。そこに、地域の人々や子どもたちが

続々と入ってくる。「毎日この温泉に来てるよ。最高だよ」「ブータンでしょ、知ってる知ってる。ウォンモさんと仲良しだからね」。そう言いながら、みんな笑顔を見せてくれた。温泉に浸かり、境内を生かしたカフェでお風呂上がりの一杯を楽しむ。ここは福祉施設であると同時に、地域の人々の憩いの場なのだ。

ウォンモさんは、デイケアサービスを利用する障害者やお年寄りの世話をしたり、カフェで配膳を手伝いながら地域の人々と交流し、佛子園のユニークな取り組みを学んでいる。「私にとって全てが新しいこと。ブータンに持って帰りたいアイデアがたくさんあります」と意気込む。タラヤナ財団では新しいコンセプトの福祉施設を計画しており、ウォンモさんらはその中心になつていく人材なのだ。

その上で参考になるのが、佛子園が今年オープンさせた「シェア金沢」。お年寄りや障害のある子どもたち、学生などが共に暮らし、温泉や屋内型運動場、共同売店、ドッグランなどがあり、地域の人々も自然と集まる。まさにソーシャルインクルージョンを体現した理想の街だ。

PLVS VLTTRA。これはラテン語で「さらに彼方へ」を意味する佛子園の基本理念だ。常に新しい福祉を目指して挑戦し続ける姿勢が、ブータンの人々全てを包む社会へもつながるはずだ。

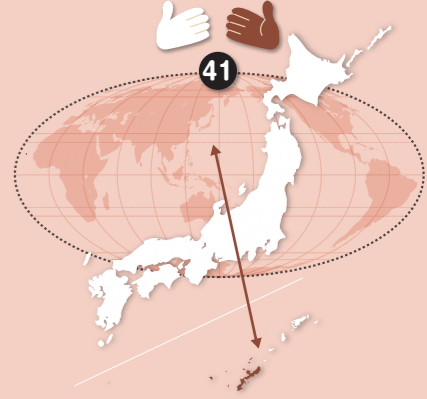


[右]ウォンモさんらは食事の提供など、どんな福祉サービスを実施しているか、実際に経験しながら学ぶ
[左]住宅や店舗、温泉などが「ごちゃ混ぜ」に設置され、人と人のふれあいが生まれるようにつくられた「シェア金沢」



日本海倶楽部のレストランで接客を学ぶゲデンさん(左)。佛子園が運営する3カ所の施設で研修中だ

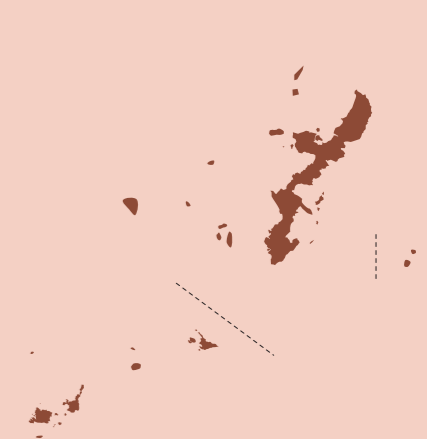




公平な教育を

約160もの離島を持つ沖縄県では、どの島でも平等に質の高い教育を受けられるよう、地域ぐるみで取り組みを進めてきた。そのノウハウを学びに、開発途上国から研修員が訪れている。

沖縄県



沖縄県

面積約2,276km²。人口約142万人。かつては琉球王国として中国や東南アジア地域との貿易で栄えた歴史を持ち、世界に開かれた国際交流拠点を目指している。太平洋戦争からの復興の経験に基づいた平和教育も盛ん。JICA沖縄国際センターでは、こうした沖縄の強みを生かした研修を実施し、開発途上国の研修員を受け入れている。

ゼロから立ち上がった 沖縄の経験を知る

真つ青な空、底まで見える透き通った海に、思わず歓声が上がります。沖縄県の中でも、ひときわ海が美しいといわれる宮古諸島。本島を含め、池間島や伊良部島など、8つの島で成り立っている。

今では橋でつながっている島もあるが、かつての移動手段は船。沖縄県は離島が多いため、いかに公的サービスを行き渡らせるかに苦心してきた。その一つが教育だ。

開発途上国も似た課題を抱えており、これは島国に限ったことではない。都市部に比べ、地方部では学校施設や教員の数が不足し、教育を受けられない子どもも多いなど、地域格差が広がっているからだ。そこで、アフガニスタン、インド、ネパール、バキスタン、ウズベキスタン、イエメン、モロッコから来日したのが、教育分野の行政官たち。元沖縄県教育長の山内彰さんから戦後の教育復興の歩みについて、沖縄県教育庁や総合教育センターの職員などから教育委員会制度や予算の仕組み、ICT教育などについて学んできた。

そしてこの日は宮古諸島に渡り、池間島にある唯一の学校、池間小中学校へ。日本の遠隔地での教育現場を視察するためだ。全校生徒は42人。校舎やプールといった施設を回り、児童数が少ないため複数の学年が合同で算数を学ぶ授業などを見学した。



池間小中学校で中学生の英語の授業を視察。一人一人自己紹介をしながら交流した研修員たち

遠隔地にも



沖縄県の教員との意見交換会。「離島での勤務に抵抗はないか」との質問に「離島は少人数制のため、教えるスキルを磨く良い経験になる」との答えが返ってきた

「少人数制だと一人一人の理解度が分かっていいですね。私の国では1クラスに50人以上もいるから大変です」と、ネパール教育省のダハール・ラージさん。すると、この研修を担当するNPO法人レキオウイングスの上原敏彦さんが、「私が子どものころは児童の数が多く、教室が足りなかったため、午前と午後の二部制だったんですよ」と教えてくれた。

太平洋戦争の戦場となり、戦後はアメリカの占領下に置かれた沖縄の復興は、まさにいばらの道だった。それでも沖縄の人々が力を入れたのが教育だ。終戦直後の1945年5月、まだ沖縄本島南部で戦闘が続く中で、中部ではいち早く学校を再開。教員も資金も不足していたが、教員や保護者、住民が一体となって校舎を建設するなど、教育環境の整備に奔走した。「戦後の厳しい状況から、試行錯誤の末、本当に短い期間で復興したことに驚かされます」と研修員たちは口をそろえた。

世界共通の願いは 子どもたちの笑顔

研修員たちが何より驚いていたのが、本島からアクセスしにくい離島でも、学校の設備はもちろん、教員の数も確保されていること。自分たちの国では、水や電気、インフラが整っていない地方部に教員が行きたがらず、十分な数を確保できない。それが共通の課題だからだ。「沖縄県の教員は、

一度は2、3年間離島に赴任し、その間は最大で給与の25%が手当として支給されます。その任期が終わると、大きな島に戻ってこられる仕組みです」と上原さんは話す。

また、教員の質を高める工夫として教員研修にも力を入れ、生徒の理解度を高める授業方法などを学ぶ初任研修、2年次研修、5年次研修と、定期的に教員向けの研修を行っている。「教員が間違ったことを教えてしまったら、生徒に大きな影響を与えてしまう。教育の質に直結する人材育成を見習いたい」と、ウズベキスタン公教育省のタシプラトヴ・デイリシヨードウさんは話す。

さらに一行は、宮古島北部にある狩俣小学校も訪れた。子どもたちが準備



戦禍により校舎が足りないため、青空教室で子どもたちが学んでいた1945年の沖縄 (写真提供: 沖縄県公文書館)



1992年に完成した宮古島と池間島を結ぶ池間大橋。美しい海が広がる

「青年海外協力隊」

本郷 良和

HONGO
Yoshikazu

過疎化が進む漁村に
唯一の日本人

南米ベネズエラの北部、カリブ海に浮かぶマルガリータ島西部のエル・オルコンは、人口約250人の小さな町。かつては漁業で栄えていたが、近年はその担い手不足が深刻だ。

若者が次々と島から都市に出ていく中で、青年海外協力隊員としてこの地に赴任した本郷さんは町で唯一の日本人。「小学生の時、ソマリアの内戦から逃れマダガスカルも持たないほどやせ細った子どもを見て、心が突き動かされました」。大学時代にはインドでボランティア活動をし、本場に役立つ協力の在り方を探したいと、大学院を休学して協力隊参加の道を選んだ。

JICA Volunteer Story

PROFILE

1985年神奈川県出身。2013年5月から大学院(国際開発専攻)を休学し、青年海外協力隊(コミュニティー開発)としてベネズエラで活動中。

「エコツーリズムで地域を元気にしたい」

ベネズエラの首都カラカスから飛行機で1時間のマルガリータ島。人口約250人の小さな漁村で活動する本郷良和さんは、地域を活性化する産業を生み出すべく奮闘している。



本郷さんが配属されたのは、絶滅危惧種の保護や環境教育、植林などの活動を行う地元NGO。季節や天候に収入が左右されやすい漁業に代わる産業を生み出すと、観光客を意識した商品の開発や豊かな自然を生かしたエコツーリズムを計画していたが、具体的に進まないまま4年が経っていた。

うまくいかない理由はどこにあるのか。本郷さんは、まず住民一人一人に話を聞くことにした。より多くの人と接して考え方を知り、活動を軌道に乗せる可能性を探ろうと、地元の学校で日本文化紹介の授業も買ってみた。

そんな約半年間の調査を経て見えてきたのは、NGOと地元住民との間にある「溝」だった。「せっかくなきゃンスをつくらうとしたのに、何もなかった」と住民への不満を漏らすNGOのスタッフたち。一方、活動に参加する予定だった住民は「私たちの生活状況を知らうともしない」と反論していた。

「互いに歩み寄る余裕がない。でもこの関係を変えなければ先に進まない」。悩んだ本郷さんは、住民がエコツーリズムよりも家事や育児などを優先せざるを得なかった理由、NGOスタッフが住民訪問できないほど多忙を極めていたことなど、それぞれの事情を説明して、双方が分かり合えるよう仲介役に徹した。

「できる時にできることをする」 「一村一品運動」

まずは何か行動を起こしてほしい。そこで本郷さんが提案したのが、「一村一品運動」だった。地元ならではの商品を開発して地域を活性化しようと、大分県発祥の「一村一品運動」からアイデアを得たもの。しかし、地域の人が集まって何かを成し遂げる習慣のないこの町では、「一村一品」は難しい。そう気付いた



a. 日本文化祭と一緒に企画した現地の友人、ヴィクトールさんと
b. エコツーリズムのセミナーで、日本の一村一品の取り組みなどについて説明する本郷さん
c. 本郷さんが企画した研修で学んだことを生かして、コンポストで堆肥をつくる住民
d. JICAのプログラムを通じて、日本から届いた野球道具などを子どもたちに贈った

本郷さんは、まず家族単位で「できることから始めよう」と呼び掛けた。

最初は「そんなことをやっても意味がない」とやる気を示さなかった住民たち。しかし本郷さんは、彼らがこの活動に意義を感じてくれるまで、辛抱強く待ち続けた。そんな彼の姿を見て、「そんなに言うなら、庭のトウガラシでチリソースを作ってみようか」「布を織ってみただけどう？」と、身の周りにあるもので特産品作りに乗り出すように。「子どもが大人になった時、職業の選択肢は多いほうがいい」と、漁業の町の強みを生かした魚料理を開発し、観光客向けのレストランを始める人まで出てきた。

そんな変化を目の当たりにしたNGOのスタッフは、この町の人たちの底力を実感。「彼らの生の声を聞きたい」と、本郷さんと一緒に1軒1軒訪ねて回り、それぞれの家庭ができる商品開発について話し合いを始めた。「最初のころは、住民やスタッフから『日本から来て一体何をしてくれるのか』と言われ、焦った時期もありました」と本郷さん。住民やNGOのスタッフのもとへ何度も足を運び、地道に人間関係を構築してきた結果、少しずつ手ごたえを感じられるようになったという。8月には、それぞれの家庭が作った作品のお披露目の場としてマルガリータ島初の日本文化祭を開き、約1000人が集まり好評だった。

来年には、いよいよエコツーリズムを始動させる予定。住民たちを集めてセミナーを実施し、共に計画づくりを進めているところだ。山間部で豊かな自然に触れるピクニックや、町の人たちが地元ならではの料理をふるまうプログラムなど、次々とアイデアが出てきて「うれしい悲鳴」だ。この町の人たちが本郷さんの豊かさを得ることができる日を、本郷さんは思い描いている。



地元の学校で調査活動をする本郷さん。とにかく直接現場に足を運ぶことを心がけている



タイの人身取引被害者支援プロジェクトの関係者と吉田さん(右から2人目)。今後の事業の方向性を議論した

金融サービスへのアクセス改善で 自立につながる支援を

開発途上国の貧しい人々の自立につながるマイクロファイナンス。吉田進一郎さんは公認会計士としての経験と知見を生かし、一人一人が経済的な将来設計を立て自立できる社会の実現を目指して奮闘する日々だ。

日本の監査法人で 働いた経験を生かして

大学卒業時に公認会計士の資格を取り、監査法人で働いていました。主な担当は、電子機器メーカーや運送会社、映画製作会社といった企業の財務諸表が適切かを確認する監査業務。M&Aのアドバイザーを務めていたこともあります。監査の仕事で学ぶことはたくさんありましたが、次第に「会計や財務の知識を生かして、金銭的な利益よりもっと広く、社会的リターンを生み出す活躍をしたい」という思いが強くなってきました。そこで転職先として選んだのがJICA。広く社会に貢献できる道を模索していた私にとって、自然な流れだったのかも知れません。

調査から多くを学んだ 貧困削減プロジェクト

最初に配属されたのは、前職の経験が直接的に生かせる財務部。JICAの財務諸表の作成や、当時導入段階にあった新しい会計処理の検討に携わりました。自ら会計処理を行い、監査に向けて膨大な資料を用意するなど、監査を受ける側の大変さを再確認する日々でした。

社会基盤・平和構築部に異動してからは、マイクロファイナンス(MF)を担当。その一つが、中米ホンジュラスの貧困層の生活向上を支援するプロジェクトです。国家の重点



施策の一つとして貧困削減を掲げるホンジュラスでは、1990年代から貧困層を対象に「CCT(条件付現金給付制度)」を展開していますが、部分的な成果にとどまっています。そこで預金口座や融資など金融サービスにアクセスできない貧困層が、将来の備えや事業を始められるよう、金融へのアクセス改善を図りつつ人々の生計向上を支援する計画を立てたのです。

2015年の開始を目指してプロジェクトの準備を担当することになった私は、現地を訪問して政府関係者や貧困層にインタビューし、生活状況や問題点を調査しました。調査期間は1カ月。CCTの受給世帯を対象に、貧しい世帯にも預金や融資などの金融サービスを提供するMF機関とも連携して貧困削減に取り組み前例のない取り組み。関係者の合意を得て、より良いプロジェクトの枠組みをつくっていくのは容易ではありませんでした。そんな苦労の末に至った両国間のプロジェクト調印式で、ホンジュラス側から「この事業は国の未来に貢献する重要なプロジェクトだ」と言ってもらい、気持ちが高揚したのを覚えています。

自立を促す マイクロファイナンスの意義

MFは途上国の貧困層を「顧客」ととらえている点で、国際協力でも可能性がある

JICA社会基盤・平和構築部
ジェンダー平等・貧困削減推進室

吉田 進一郎
YOSHIDA Shinichiro

大学卒業後、公認会計士として監査法人に勤務。2010年からJICAに転職。財務部を経て、2011年から現職。



インドのマイクロファイナンス機関のCEOと

取り組みです。ビジネスとして金融取引が成立すれば持続的な貧困削減にもつながります。

しかし万能策ではなく、使い次第では過剰債務などが発生し、貧困層を苦しめてしまいます。健全な形でMFを必要とする貧困層に届くよう少しでも貢献したい。前職では貧困削減に携わる機会はありませんでしたが、会計や金融の知識を生かして人々の自立を促す今の仕事にやりがいを感じています。

現在の部署では、ジェンダーやMFを含めた貧困削減の視点、最新の国際的潮流の情報といった付加価値のある知見を他の部署に提供するなど、分野横断的な貢献が求められます。新しい取り組みに積極的にチャレンジして教訓を得る前向きな姿勢が必要になるため、国際会議や研修で専門性の高い他機関の出席者に刺激を受けながら、勉強の日々です。金融だけでなくさまざまな分野の経験を積んで専門性を磨き、もっと世界に貢献できるように、これからも努力していきます。

第10回JICA理事長表彰が決定

01



表彰式の参加者と田中JICA理事長(前列左から4人目)

10月21日、第10回JICA理事長表彰の表彰式が行われました。これは年1回、開発途上国の経済・社会の発展、住民の福祉の向上などに大きく貢献した事業と、専門家やボランティアなどの個人に対して贈られるものです。冒頭、田中明彦JICA理事長は受賞者に対して、「日本の技術・知見を活用しながら、途上国の人々と共に、国づくりや人材育成、地球規模の課題に取り組んで顕著な成果を上げており、まさに日本らしい協力を実現しています」と感謝を述べました。

今回、JICA理事長賞を受賞したのは個人2人と7事業。その一つが、タイのチャオプラヤ川流域洪水対策事業です。複雑な氾濫状況を調査・解析し、タイ政府が計画した3分の1の費用で同様の効果を持つ計画を提案し、高精度の洪水・氾濫予測を行政・一般に提供するシステムが高く評価されました。この事業を担当した株式会社社建設技研インターナショナルの三品



受賞事業を代表してあいさつした三品執行役員(左)と村岡さん

孝洋執行役員は、「好きな仕事を思い切りできるのは幸せ。タイの人々から『ありがとう』の一言をもらえるだけで報われます」と語りました。

もう一つの受賞は、ウズベキスタン・タシケント市での盲ろう者のコミュニケーション支援事業。JICA初の盲ろう当事者の専門家(福田暁子さん、村岡美和さん)が通訳・身体介助者を伴って現地に赴き、ワークショップや通訳介助者養成講座などを実施。盲ろう者に対する理解促進と支援実施体制の構築に寄与し、障害当事者の国際協力への参加を実現させた点が評価されました。村岡さんは、「それまで外出もままならなかった現地の盲ろう者と語り合い、抱き合せて喜んだことが忘れられません。他の国でも支援したい」と手話で意欲を語りました。

さらに、長年国際協力に携わってきた個人と団体を表彰する「JICA国際協力感謝賞」も個人2人と7団体に贈られました。

青年海外協力隊が読売国際協力賞・特別賞を受賞

02



協力隊経験者代表として表彰を受ける渡邊さん

2015年に50周年を迎える青年海外協力隊事業が、第21回読売国際協力賞・特別賞を受賞しました。同賞は1993年、読売新聞創刊120周年を記念して創設され、第1回の緒方貞子国連難民高等弁務官(当時)を皮切りに、国際協力の分野で活躍した個人、団体、企業が表彰されてきました。

今回の受賞は、半世紀にわたり開発途上国で実施された4万人近い青年海外協力隊の活動、そしてその経験を生かした日本での活動が高く評価されたもの。本事業を支える一般社団法人協力隊を育てる会と公益社団法人青年海外協力協会にも贈られました。11月11日の贈賞式では、マラウイで言語聴覚士として活動した渡邊千紘さんが代表で表彰を受けました。今回の受賞が事業のさらなる発展につながり、多くの市民の皆さんの理解にもつながることが期待されます。

寄附で国際協力の第一歩を踏み出そう!

03



JICA基金の支援を受けて活動する一般社団法人コミュニティー・4・チルドレンのフィリピンでの障害者支援

日本にいなながらも、思い立った時にいつでも簡単にできる国際協力。その一つが寄附です。現在、日本国内のNGOとJICAが連携して、市民の皆さんの国際協力への理解と参加を促進しようと、共同寄附キャンペーンを実施しています。

JICAが実施する「世界の人びとのためのJICA基金」に寄せられた寄附は、開発途上国で活動するNGOなどの活動を支援しています。また、認定NPO法人国際協力NGOセンター(JANIC)のような各NGOをつなぐネットワークNGOや、そこに加盟するNGOに寄附する方法もあります。

あなたも、日本発のNGOを応援してみませんか?

【キャンペーンサイト】 www.jica.go.jp/partner/private/kitu/60th.html
 【問い合わせ】JICA国内事業部 市民参加推進課
 【TEL】03-5226-8789

「チョコレートと青い空」で つながる

作家
堀米薫



かつての研修員クリスさん(左から5人目)の農場を訪れた著者(左から2人目)。キュウリやナス、トウモロコシなどが栽培されていた

私が暮らすのは宮城県角田市。仙台から南へ約40キロ、大豆やウメなどの栽培が盛んな街だ。地元の農家が立ち上げた「角田市アジアの農民と手をつなぐ会」を中心に、開発途上国で農業に携わるJICAの研修員を多数受け入れている。

今から15年前、我が家で初めて受け入れたのが、ガーナからきたクリスさんだった。ガーナといえば「チョコレートの国」だと思っていた私たち家族。しかし、「現地の子どもたちは、ほとんどチョコレートを食べることがない」と彼から聞いてショックを受けた。自らの無知に、その時初めて気付かされた。

その後も毎年のように、ケニア、パラグアイ、ドミニカ共和国、アンティグア・バブータなどからやってきた研修員を受け入れた。彼らと過ごした時間は、とても意

義深いものだった。自分の国を良くしたいという熱意に刺激を受けるとともに、文化や事情は違っても家族への愛は人類共通であることに、深く共感した。

農業や自然をテーマに児童文学を書くようになった時、そんな研修員たちとの経験を物語にしたいと考えた。そうして出版したのが「チョコレートと青い空」(そうえん社)。日本の農家の小学生とガーナ人の青年、エリックさんの心の交流の話を通じて、これからの時代を生きる子どもたちに、もっと社会や世界に目を向けてほしいという願いを込めた。子どもと大人と一緒に読むことができるのが児童文学。2012年度の全国課題図書にもなり、幅広い年代の方に読んでもらうことができた。



堀米さんが執筆した「チョコレートと青い空」の翻訳版『Chocolate and The Blue Sky』(二階恭子翻訳)は、2014年6月にガーナで出版

その後、台湾でも翻訳版が出版され、他の国の人もこの物語を共有できる手ごたえを感じていたころ、当時の駐ガーナ日本国特命全権大使夫人である二階恭子さんから、「英訳して子どもたちに読み聞かせたい」というメールが届いた。

当初は読み聞かせだけの予定だったが、二階さんの翻訳原稿を読んだアミサ・アーサー副大統領夫人が、ガーナでの出版を強く勧めてくれた。日本への理解を深めてもらえるよう、英訳本には日本の田園風景や食べ物カラー写真もたくさん入れた。

今年6月、出版記念会に参加するために首都アクラを訪れ、ついに、念願のガーナの土を踏んだ。日本製の中古車がたくさん走っていて道路は大渋滞。高層ビルや立派な門構えの家も建っていて、一見都市化が進んでいるように見えた。しかし停電がたびたび起き、インフラの整備が追いついていない印象はぬぐえなかった。

二階さんと一緒に、アクラ市内の小学校を訪ねることができた。世界地図を指差して「日本はどこにあるか知ってる?」と質問をすると、「戸惑う子どもたち。「まだまだ日本のことは、よく知られていないんだな」と少し残念に思ったが、二階さんが英語で本の読み聞かせを始めると、子どもたちから笑い声が起こった。主人公の少年が、日本語とガーナ語の発音が似ていることに

びつくりする場面だ。子どもたちからは、「エリックさんが自分の国に誇りを持っていることが印象に残った」などの感想を聞くことができ、国境を超えて共有できる物語の力を確信した。そして、ガーナの子どもたちにも、もっと日本のことを知ってほしいと、さらに強く思った。

その後、かつて我が家を訪れたクリスさんが働いているアクラ郊外の農地を見学させてもらった。15年ぶりの再会だ。かんがいとスプリンクラーが整備された畑で、収穫物を頭の上に載せて運ぶ女性たちを見て

いたら、クリスさんに「日本で学んだことは役に立っていますか?」と尋ねずにいられた。すると、満面の笑みで返ってきた答えは、「Very very very」の「very」が3回も思わず、「あー、良かった!」と心の底から感動し、喜びを感じた。

ジョン・マハマ大統領は、在ガーナ日本大使館での勤務経験を持つ親日派で、英訳本の前書きを執筆していただいた。「日本は長年にわたり、道路建設などの基礎的なインフラ整備に加え、保健や教育などさまざまな分野でガーナを支援してくれました。2011年の東日本大震災では、ガーナの人々も日本に連帯感や共感の気持ちを伝えましたが、その直後も日本は決められた政府開発援助(ODA)を途切れることなく提供し続けてくれたのです。私は、日本人の勤勉の精神、誠実さ、度量の広さに敬意を表します」(抜粋)。

「Chocolate and The Blue Sky」を通して、ガーナの子どもたちが物語の主人公と一緒にわくわくしながら、日本への親しみを深めてくれたらどんなに素晴らしいことだろう。アクラでも本屋さんにはわずかな軒数。学校の副読本として贈るための寄附を募っているところだ。1冊でも多くの英訳本が、ガーナの子どもの手に渡ることを願ってやまない。

同じ空の下、ガーナと日本がさらに心を結び合えますように!

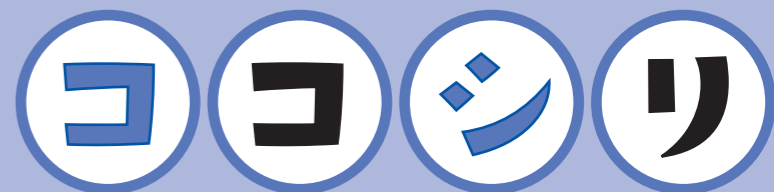


翻訳者である二階さんと共に読み聞かせをしたガーナの小学校の子どもたちと

<Profile>

ほりごめ・かおる

1958年福島県出身。岩手大学大学院修了。児童文芸家協会創作コンクール優秀賞作品『牛太郎、ぼくもやったぜ!』(佼成出版社)がデビュー作。宮城県角田市で専業農家の傍ら、田んぼや畑の中から生まれる物語を書き続けている。児童文芸家協会会員。



「ココが知りたい」。国際協力に関する
いろんなトピックを分かりやすく解説します!



ODA広報

「国際協力60周年」 僕らが世界に できることを探そう!

2014年は日本が政府開発援助 (ODA) を開始して60年。より多くの方に国際協力に興味を持ってもらうための取り組みを紹介します。

まるごと一冊が国際協力!



雑誌『BRUTUS』(株式会社マガジンハウス、2014年10月15日号)では「国際協力60周年」を特集。国際協力への一歩を踏み出したい方にぴったりの一冊。マガジンハウスのオンラインショップ (magazinehouseshop.jp/SHOP/BU787.html) より購入可能。

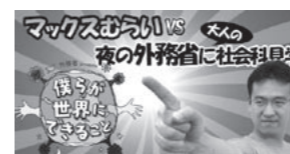
国際協力のイロハが
学べるウェブサイト



世界一分かりやすい国際協力の情報サイト「#EARTH ACTION STUDIO JAPAN」(earthactionstudiojapan.go.jp/) が開設中。国際協力の第一線で活躍している人々や、現在行われている日本各地の国際協力のイベントなどの情報が満載。

〈 ODAを知るならここもチェック! 〉

マックスむらいが
外務省を徹底調査!



タレントのマックスむらいさんが大人の社会科見学として夜の外務省を訪れ、国際協力やODAについて学ぶ「マックスむらいvs夜の外務省に大人の社会科見学 国際協力 (ODA) を勉強せよ」がニコニコ動画 (live.nicovideo.jp/watch/lv198460642/) で公開中。

本がアジアなど開発途上国を支援する枠組み「コロンボ・プラン」に加盟したのが1954年。この間、日本は世界各地でさまざまな国際協力を実施してきましたが、その現場の様子が一一般の方々にはあまり知られてこなかったのが現状です。そこで外務省は2014年「国際協力60周年」をきっかけに、さまざまな企画を実施していきます。その一つが、日本初の外務省 presents 情報バラエティー番組

『僕らが世界にできること』。政府開発援助 (ODA) や国際協力に関する情報を多くの若い方に知ってもらうために、世界を身近に感じられる内容をふんだんに盛り込み、どこよりも国際協力を分かりやすく伝える番組を目指しました。番組内では、タレントのTEMPURAKIDZ、たかまつななさんがフィリピンとバン格拉デシュで日本の国際協力の現場を視察。スタジオで外務省の荒木要企画官が解説を加えました。10月3日19時からニコニコ生放送とTOKYOMXで同時放送され、現在YouTube (www.youtube.com/watch?v=OZ1VVA007w/) で公開中です。これを受けて、10月17日には『僕

らが世界にできること』音楽篇』が六本木のイベント施設・ニコファーレで開催され、スチャダラパー、中孝介、Yun*chi、TEMPURAKIDZ、ROOT FIVEらアーティストによるスペシャルライブ、国際協力に関するクイズを交じえたトークも行われました。城内実外務副大臣も番組冒頭で出演し、日本による国際協力の必要性、近年のODAの状況などについて語り、会場は大いに盛り上がりました。スチャダラパーのBOSEさんは、「日本人だからこそできるきめ細やかな支援を、これからもやっていければ」と語り、出演アーティストもそれぞれに、自分たちができる国際協力への思いを語りました。



「島国固有の問題には国際的な協力が不可欠」と、本会議で強調する牧野前外務大臣政務官



「気候変動と防災」分科会では、日本の強みを生かした防災協力などについて紹介

9月15日、「第3回小島嶼開発途上国 (SIDS) 国際会議」がサモアで開催されました。SIDSには、太平洋、カリブ、アフリカ地域などの38カ国の国連加盟国、複数の非国連加盟国・地域が含まれ、小島嶼国特有の課題解決に向けて、約10年に1度、国際会議を開催しています。今回は約40の国・地域の首脳級・閣僚級、約10の国際機関の代表、日本からは牧野たかお前外務大臣政務官が出席しました。近年は特に、気候変動や防災の分野での脆弱性への対応が急務とされているSIDS。潘基文国連事務総長はスピーチで、2014年が「国

「第3回小島嶼開発途上国 (SIDS) 国際会議」 小さな島国の未来に貢献

際SIDS年」であることに触れるとともに、SIDSが直面する気候変動問題に対する具体的な行動の重要性を強調しました。これを受けて、牧野前外務大臣政務官は、気候変動、防災、保健分野における日本のSIDS支援策について紹介。今後3年間で5000人の人材育成を行う旨を発表しました。また、本会議と平行して加盟国、国際機関、市民社会とのマルチステークホルダー会合が行われ、牧野前外務大臣政務官が共同議長を務めた「気候変動と防災」分科会では、国際社会と連携した取り組みの強化が重要だと確認されました。

Message from Cuba 日本とキューバをつなぐコメ



現地の人々に熱心に田作りについて指導する日本人専門家



機械の使い方も直接やって見せることで習得が早まる

キ ユーバの人々はコメが大好き。一人当たりの平均消費量は日本人以上ですが、自給率は3割程度と低く、コメの増産が大きな課題となっています。そこでコメ作りを得意とする日本は2003年から10年以上にわたり、人づくり、制度づくりを中心に技術協力を通じた支援を続けてきました。多くの開発途上国では、稲作農家は貧しい暮らしを強いられてきました。しかしキューバでは、政府によって比較的高い買い取り価格が優遇されるため、都市部の労働者よりも恵まれた生活を送るコメ農家が多いように感じられます。日本からの技術

在キューバ日本国大使館 一 築山 淳志 二等書記官 (現中南米局南米課)

移転がさらに進めば、この国のコメ作りの将来は明るいのではないかと日本人専門家は考えています。深刻な物不足や厳しい政府の統制により資機材の入手が困難であるなど、プロジェクトを進める上では多くの苦労があります。しかし、キューバの人々は教育水準が高いため飲み込みが早く、技術の習得にも熱心なので、やりがいがあるといえます。他方、現場で一緒になって汗を流す日本人専門家の姿勢はキューバ側から高く評価されています。お互いに敬意を払い、歴史的な友好関係を築いてきた両国民の交流の縮図がここにあるのです。

現地からのメッセージは、ODAメールマガジン (www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/mail/) でご覧いただけます。

世界一雷の多い湖

Venezuela
[ベネズエラ]

写真・文＝鈴木智子(フォトエッセイスト)



マラカイボ湖南部にあるオロガ村の湖上生活。
村は半島のように長細く、端から端まで歩いて
も10分。軒下の洗濯物が家を華やかに彩る



湖の奥には熱帯雨林気候の浸水林が広がり、野生のホエザルやグリーンイグアナ、ツノサケビドリなど多くの野鳥が生息している



赤ちゃんを抱えながら食事を取るお母さん。赤ちゃんも元気に泣き、健康に育っている



玄関はバルコニーのようになっていて、この家は洗濯機を置いていた。野生のサルも家族の一員だ



朝早く漁に出かけて戻ってきたお父さん。大人も子どもも暑くて何もしたくなくなる午後。みんなでだらっとするのも大切な家族の時間だ

地球ギャラリー vol.75

ベネズエラの北西に位置するマラカイボ湖。南米大陸の中で、チチカカ湖とも並ぶ大きな湖だ。毎日のように積乱雲が発達し、夜には稲光が輝く不思議な場所だ。

しかし、地元の人たちは雷の鋭さとは真逆。ゆったりとした笑いの中に包まれたラテンの人々だった。絶対的権力を誇っていたウゴ・チャベス元大統領が亡くなってから、政情が安定しないまま。砂糖やサラ

ダ油など生活必需品の流通も滞り、不便なこともあるけれど、湖畔は静かで普通の生活だ。「大都市にいると暴動も起こるか、やっぱり田舎に限るよな。ハッハッハ」と、のんきに笑う。昼時の暑くて何もしたくなくなる時間には無理して動かず、友人と家族と近所の人たちとのんびり座って話していればいい。そういった感じである。母親たちも、家事と子育てにあく



日が暮れ、じっとりした空気に包まれるマラカイボ湖。積乱雲が発達して、夜通し稲光が縦一直線に走る。静かに光るだけの時もあれば、嵐を呼ぶこともある



マラカイボ湖があるスリア州の州旗は雷マーク。小学校の入り口の壁にも描いてあった



床に穴が開いただけのトイレ。人々の生活は自然と一体になっている



夕方にはお風呂を終えて、みんなそろって食事をする。村の小さな発電機が壊れていなければテレビを見ながらの団らん。停電の時は早めの就寝だ



町と湖上の家々を往復する観光ガイドの男性。観光客にもらったチップで野菜を買い村人たちと分かち合う。観光客がくれた古着を寄附することもある

地球ギャラリー vol.75

船着き場に揚がった巨大なエイ。マラカイボ湖の北部はカリブ海とつながっているののでいろいろな種類の魚がとれるようだ



ハンモックに乗せて子守りのお手伝い。あまり揺らし過ぎて、お姉ちゃんの方が水に落ちそうになっていた

そんなまったりとした時間は、日本の都会で育った私には、短い休暇でしかあり得ない夢の中の夢。そう思っていたが、それを現実としていた人たちがここにはいた。
 トイレに行った。浮き家の床に穴が開けてあるだけで、すぐ下は湖だ。用を足すと、一瞬で魚の群れが水しぶきをあげて食べにきた。大量の魚が湖にいるのにギョツとした。これだけ魚がいれば、飢えることはないだろう。
 いくら最新の工業製品がなく、都会の人々に貧しいと思われようとも、飢えへの心配とはほど遠い生活だ。都会人が常に抱える将来への不安、お金を稼ぐのに必死になる姿は見ら

れなかった。湖には魚がいる。そして、家族、親せきがいつもそばにいてくれる。
 「あーあ、またへましちゃったよ」
 「仕方ないさ」
 「そうだよな」
 将来への不安から解放されたれ、過去の悪さを責められることもない。そこには、今をみんなで笑い合える人々の姿があった。
 現在、湖上には政府が援助する鉄筋家屋の建設が始まり、近い将来、彼らの生活も変わっていくだろう。ただ今は、どこまでも続く水平線と大きな空をふるさとしていた人たちの笑顔が、子どもも大人もとても人間らしく感じられるのだった。



夕方のお風呂上がりの少女。お風呂は家から飛び込める範囲の湖の中。子どもには少し深いけど、ちょうどいい深さのところを選んで泳いで移動する

音楽で子どもたちを
育む仕組みといえは

エル・システマ



ベネズエラの国旗があしらわれたユニフォームを着て演奏するエル・システマの子どもたち。世界的にも著名なアーティストを輩出してきた

貧困や若者の犯罪が深刻なベネズエラ。それを音楽で変えようと活動を続けるのが、シモン・ボリバル音楽財団だ。ベネズエラ全土に音楽教室を開き、楽器は無償で提供。参加する子どもたちはなんと40万人を超える。子どもオーケストラや合唱団として世界各地で演奏を披露することもあり、世界最大の音楽教室といわれるまでに発展した。

単に楽器の演奏技術を教えるわけではない。社会から孤立している貧困層や障害のある子どもたちは、一つの音楽をみんなで作ることで、協調性や社会性、コミュニケーション能力を次第に学んでいく。コミュニティーの一員としての自覚が生まれ、非行や犯罪に走らず、自立心を育むことが目的だ。

この「エル・システマ」と呼ばれる活動は世界中に広がり、2012年には日本でも活動を開始。東日本大震災の被害を受けた福島県相馬市や岩手県大槌町で子どもオーケストラなどを立ち上げ、音楽を通じた復興に貢献している。



ろうあ者が白い手袋をして手話で歌う「ホワイト・ハンド・コーラス」も評価が高い

地球ギャラリー

ベネズエラの文化を
知ろう!

取材協力：駐日ベネズエラ・ボリバル共和国大使館
Photos: Courtesy of the Venezuelan Embassy in Tokyo

ベネズエラの主食は、トウモロコシの粉から作ったパン。「アレパ」と呼ばれ、チーズや肉、アボカドなどを挟んでハンバーガーのようにして食べる。また、定番料理の「パベリオン・クリオリヨ」は、牛肉、黒豆、白いごはん、食用バナナのフライを載せたワンプレートで、屋台などで手軽に食べられる。全般的に塩と砂糖を使った甘辛い味付けが特徴だ。

そして、クリスマスの時期に登場するのが「アジャーカ」。豚肉、牛肉、鶏肉、オリーブなどをトウモロコシの粉を練った生地で包み、さらにバナナの葉でくるんで蒸したものだ。この時期だけのちょっとぜいたくで特別な料理だ。

駐日ベネズエラ・ボリバル共和国大使館のモーリス・レイナ文化担当官の「我が家に代々伝わるレシピ」は「ロモ・デ・コチノ・アル・マンゴ」だ。「マンゴーは10キロ約500円と安く、そのままデザートとして食べるだけでなく、料理にも使われます。庭にマンゴーの木がある家庭では、熟すと家の前に置いて分けてくれることも。誰でも好きに食べていいんですよ」。誕生日など特別な日には、マンゴーの香りが漂う大皿料理をみんなで楽しむのが恒例だ。

ベネズエラ料理といえは
豚肉のマンゴーソースがけ

ロモ・デ・コチノ・アル・マンゴ



【RECIPE】

●材料(20人前)

豚肉(ロース)3kg/タマネギ2個/赤パプリカ2個/ニンニク8片/パセリ1束/白ワイン1カップ/マンゴージュース1L/油・塩・黒コショウ少々

- 1 豚肉に塩と黒コショウをふり、大鍋に油をひいてこんがり焼く。
- 2 タマネギと赤パプリカをすりおろし、ニンニクとパセリを細かく刻む。
- 3 ①をオープン用の深いトレーに入れ、②と白ワインを入れる。
- 4 300度で③に焼き色がついたら、温めたマンゴージュースを加え、250度に下げて約1時間半焼く。串を刺して透明な肉汁が出たらOK。取り出して冷ます。
- 5 残ったマンゴージュースは半量になるまで煮詰めてクリーム状にし、輪切りにした④にかける。
- 6 ジャスミンライスかパタコーネス(食用バナナのフライ)を添えて出来上がり。



具を豪快に挟んで食べる主食のパン「アレパ」

イチオシ!

M OVIE

『イロイロ めくもりの記憶』

舞台は1997年のシンガポール。この国で暮らす共働き夫婦の一人息子、ジャルーはわがままな問題児だ。手を焼いた母親の決断で、住み込みの家政婦として、フィリピン人のテレサがやってくる。祖国にいる息子への思いを抑えて必死に働く彼女に、ジャルーは自分を重ね合わせ、次第にテレサに心を開いていく。そんな中、アジア通貨危機が起こり、父親はリストラに。母親も、息子がなついたテレサに嫉妬にも似た複雑な気持ちを抱き始めていた…。一人の少年と家政婦の交流を通して、国境を超えた普遍的な価値とは何か、気付かせてくれる。



©2013 SINGAPORE FILM COMMISSION, NP
ENTERPRISE (S) PTE LTD, FISHEYE PICTURES PTE LTD

2013年/シンガポール/99分

監督: アンソニー・チェン

出演: ヤオ・ヤンヤン、チェン・ティエンウン、アンジェリ・バヤニ他

公開: 12月13日(土)よりK's cinema(東京・新宿)他 全国順次公開

URL: iloilo-movie.com/

配給: Playtime

E VENT

『ワールドクリスマスフェスティバル2014』

世界の人々は、クリスマスをどのように過ごすのだろう? そんな疑問を持った人は、このイベントに出かけてみよう。会場には各国で親しまれているクリスマスソングが流れ、メインステージではベリーダンスやサルサ、カポエイラなどの世界の伝統舞踊などが披露される。また、料理ブースではチキンのグリルをはじめ、タイやインドなどのクリスマスにちなんだ特別メニューが楽しめる。今年はいつもとちょっと違うクリスマスを過ごしてみよう。

会期: 12月20日(土)~23日(祝) 10~19時

会場: 代々木公園ケヤキ並木(東京)

問・TEL: 090-5563-9930

URL: www.wmiba.com/worldchristmas/

B OOK

『みんなのチャンス ほくと路上の4億人の子どもたち』

雨風を避けられる家があり、毎日一日3食、おなかいっぱい食べることができる。日本では当たり前のことだが、世界には学校にも行けず、路上で生活している子どもたちが4億人もいる。それでも彼らは、友達をつくり、遊び、笑い、どんなにつらくても前に進もうとしている。いくつもの開発途上国を取材してきた著者が、自身が撮影した写真を通じて世界の子どもたちの現状を訴える。日本で暮らす子どもたちに、自分の“チャンス”に気付いてほしい。そんな願いが込められた一冊。



石井光太 著
少年写真新聞社
1,512円(税込)

この本を
1人の方に
プレゼント
詳細は
38ページへ

B OOK

『アフリカ料理の本 62の有名なアフリカンレシピ&物語』

キャッサバ、ヤムイモ、バナナ、トウモロコシ。山や海、川、砂漠などで採れた自然の恵みに、多種多様なスパイスを効かせたアフリカの料理。本書では、飲み物からスナック、スープ、メイン料理、デザートにいたるまで、さまざまなレシピを紹介する。アフリカの自然や風土、主食などについて、そして人々の生き方を感じさせるストーリーも盛りだくさんだ。この本を片手に料理を作って、アフリカ一周の旅を体験してみよう。



この本を
1人の方に
プレゼント
詳細は
38ページへ

白鳥くるみ 著
アフリカ理解プロジェクト
2,160円(税込)

読者の声

「9月号特集 インフラ整備「世界に発信！日本の技術力」を読んで」

■私と同年代の人がシニア海外ボランティアとして、南米のコンビアで活躍する様子に感動を覚えました。プラスチック加工が専門のようですが、技術だけではなく、技術者としての心構えについても、長年の経験を生かして指導されています。素晴らしいことだと思います。（東京都／男性／62歳）

■私にとって中東やアフリカのイメージは、テロや紛争といったマイナスの印象ばかりだった。それは、日本国内のメディアで取り上げられていくことしか知らないからだろう。優しさにあふれて、平和で穏やかな時間を望む彼らの姿が、もともと日本国内の多くの人々に伝わればいいのと思う。（千葉県／女性／32歳）

「10月号特集 地域発の国際協力「ニッポン魂が生きる」を読む」

■特集「紙すきの伝統を未来へ」は大変参考になる記事です。日本の伝統産業の技術がブータンで生かされていることを知り、興味を持ちました。ブータンは心豊かな国、それは紙すきの技術を学ぶ人々の表情からも伝わってきます。風土産業の原点を見る思いがします。（東京都／男性／62歳）

■「Voice」の記事が良かったです。長岡市の国際交流センター「地球広場」が目指したのが、「用がなくても行きたくなる場所」という部分は、思わず「そうだよな！」と得心しました。交流の場の基本はこれだなと思いました。目からウロコという感じです。（群馬県／男性／60歳）

■日本の地域と国際協力が結び付いている点が多々あることを知りました。JICAは海外に出て活動しているイメージでしたが、国内でもさまざまな活動を行っているのですね。日本の地域開発にもなり、良いことだと思います。（大阪府／女性／23歳）

本誌へのご意見・ご感想や
JICAへのご質問を
お寄せください。

プレゼント
付き

添付のアンケートはがき、Eメール、FAXから、本誌に対するご意見やご感想、またJICAへのご質問を、氏名・住所・電話番号・職業・年齢・性別・ご希望のプレゼントを明記の上、お送りください。ご記入いただいた個人情報は統計処理およびプレゼント発送以外の目的で使用いたしません。当選者の発表は発送をもってかえさせていただきます。

◎応募締切：2015年1月15日

Eメール：jica@idj.co.jp
FAX：03-3221-5584（『mundi』編集部宛）

- ① ウガンダシルクのストール
- ② 書籍『みんなのチャンス ぼくと路上の4億人の子どもたち』（p37参照）
- ③ 書籍『アフリカ料理の本 62の有名なアフリカンレシピ&物語』（p37参照）



①



②



③

本誌をご希望の場合は
下記方法で
お申し込みください。

申込方法

本誌をご希望の方には、送料をご負担いただく形でご送付いたします。巻末の払込取扱票に、氏名・住所・電話番号・ご希望の送付期間・送付開始月を明記の上、指定の金額を郵便局でお支払いください。入金確認後、発送手配をいたします（入金から1週間程度かかることもありますのでご了承ください）。複数冊、またはバックナンバーをご希望の方は送料が異なりますので、下記までお問い合わせください。

申込先 (株)国際開発ジャーナル社 総務部(発送代行)
住所 〒102-0083 東京都千代田区麹町3-2-4 麹町HFビル9F
TEL 03-3221-5583
FAX 03-3221-5584
Eメール order@idj.co.jp



次号予告 (2015年1月1日発行予定)

青年海外協力隊50周年

今から50年前、日本の青年たちが第1号の「青年海外協力隊」として、開発途上国に飛び立った。半世紀にわたるその歴史を振り返りながら、今と昔の協力隊員の奮闘ぶりを紹介します。

※2014年11月号「特集」6ページのグラフィックを以下に訂正いたします。
開発途上国が直面する課題における紛争影響国の割合

mundi

DECEMBER 2014 No.15

編集・発行／独立行政法人 国際協力機構 Japan International Cooperation Agency : JICA

〒102-8012 東京都千代田区二番町5-25 二番町センタービル

TEL : 03-5226-9781 FAX : 03-5226-6396 URL : <http://www.jica.go.jp/>

バックナンバーはJICAホームページ(<http://www.jica.go.jp/publication/mundi>)でご覧いただけます。

本誌掲載の記事、写真、イラストなどの無断転載を禁じます。



©Yuki Asada

カギ編みストールであたたかに

手元には小さなカギ針と真っ白なシルクの糸。ウガンダの首都カンパラから1時間、豊かな自然が広がる町カワンダで暮らす女性たちは、今日も朝から忙しそうだ。「シルクのストールを作っているのよ」。そう話す顔に、自然と笑みが広がる。

今から約4年前、青年海外協力隊員としてこの国に赴任した富士雅子さんは、地元の女性たちと2年間、現金収入につながる製品作りに取り組んだ。その一つが先輩隊員から受け継がれたストール。あまり知られていないが、ウガンダの女性たちは手先が器用なのだ。

まずは糸の準備から。手作業で丁寧に紡がれた糸が、一本一本、カギ針で編み込まれていく。完成したストールは身

近な草花を使って、何とも繊細な色合いに染め上げられる。

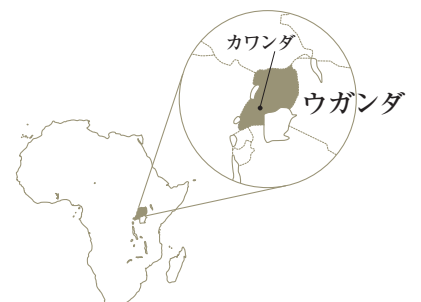
全て手作りのため、色も模様も1点1点異なり、作り手の個性が出てくるのも魅力。使えば使うほど肌になじみ、使う人に合った特別なモノに育っていく。作る人たちの愛情と喜びがたくさん詰まった製品だ。

日本人たちにもウガンダシルクの魅力を伝えたい。富士さんは帰国後に「UG silk」を立ち上げ、日本に仕入れて販売を続けている。「もっと日本人の好みに合うようなデザインを提案して、みんなの生活がより幸せにあふれたものになりたい」。ウガンダの女性たちとつくり出す夢は広がるばかりだ。



カギ針を動かしながら、女性たちのおしゃべりもはずむ

★ストールを3人にプレゼント! →詳細は38ページへ





私の
**なんとか
しなきゃ!**

Vol. 50

PROFILE

1961年東京都出身。学生時代からバンド活動を始め、19歳の時にサルサと出会う。84年にサルサバンド「オルケスタ・デ・ラ・ルス」を結成し、90年にファーストアルバム「DE LA LUZ」で国内外デビューを果たす。南米ツアーなど世界的な活動が認められ、国連平和賞、文化庁芸術選奨文部大臣新人賞、New York 批評家協会賞など受賞歴多数。

幼いころから、いつも音楽がそばにある生活でした。バンド活動もやっていたのですが、一番興味があったのはやはり海外の音楽。スティービー・ワンダーが特に好きで、日本人が考えもつかないようなリズムが、それまで行ったことのない世界に連れていってくれるような気がしました。

その後の人生を導くサルサと出会ったのは、大学に入ってからです。サルサの本場といわれるニューヨークにお金をためて行き、国境も人種も何もかも超えてみんなが一体になれる歌と踊りのとりこになりました。念願かなって「オルケスタ・デ・ラ・ルス」としてデビューしてからは、日本国内だけでなく、南米を中心に世界各地をツアーで回っていました。最初は「日本人がサルサ?」という思いで足を運んだお客さんも、曲が始まった瞬間、一つになれる空間がそこにはありました。

海外ツアーではたくさんの出会いがありますが、20年前にペルーの首都リマからバスで3時間ほど行った町で出会った少年のことは今でもよく覚えています。ホ



テル近くのレストランに行こうと歩いていると、夜道に私たちをじっと見つめる少年がいたのです。とても裕福とはいえない身なりでしたが、そのキラキラとした目が気になって。聞くと両親は別の町に出稼ぎに行っていて、ごはんは教会で食べさせてもらっているとのこと。何を求めるわけでもなく、私たちがレストランにいる間もずっと外で待っていました。

次の日ライブが終わってホテルに戻って窓の外を見たら、その少年を含む数人の子どもたちが待っていて手を振ってくれました。私たちは日本からここまで来て好きなサルサができるけれど、そんな私たちのライブに足を運べない人がたくさんいる。胸が締め付けられる思いがしました。そんな子どもたちのために音楽を通じて何かできればという気持ちを、それからずっと持ち続けています。

その後、解散していた時期もあったのですが、あることをきっかけに再結成することになりました。2001年のアメリカ同時多発テロです。私とサルサを結び付けるきっかけとなったニューヨーク、このテ

ロの影響に苦しんでいる人たちの力になりたいと決意した時、サルサと一緒にやってきた仲間の力を借りるしかないと思いました。メンバーに電話をかけると二つ返事でOKをくれて、チャリティーコンサートを開くことができました。私たちの音楽を聞いてくれた人が、世界で起こっていることに少しでも目を向けてくれるのなら、これ以上うれしいことはありません。

「オルケスタ・デ・ラ・ルス」は、今年で結成30周年を迎えました。歌と踊りがあれば、言葉が通じなくてもつながり合うことができる。これはまさに、私たちがこの30年で体感してきたことです。これからも世界各地で日本人が奏でるサルサの魅力を伝えながら、国境を超えて人と人をつないでいければと思っています。

「なんとかしなきゃ!プロジェクト」は、開発途上国の現状について知り、一人一人ができる国際協力を推進していく市民参加型プロジェクトです。ウェブサイトやFacebookの専用ページを通じて、さまざまな国際協力の情報を発信していきます。

「なんとかしなきゃ」で 検索